
かぐや姫の置き土産

夕風秋香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かぐや姫の置き土産

【Nコード】

N2241U

【作者名】

夕風秋香

【あらすじ】

私の通う学園には、御伽噺として知られている「かぐや姫」が居たという伝説が残っていた。かぐや姫は、秘密裏にこの学園の創設者の祖先にある物を預け、月に帰ったという。

代々それを大切にし、今でも学園長はかぐや姫が戻ってくるのを待っているらしい。

だが、この学園を建て、皆がかぐや姫の伝説を忘れた頃、夜中0時になるとあいつらが現れるようになった。学園長はあいつらが外に出るのを恐れ、あいつらを見ることのできる人間を、この学園に集

めた。

妖獣を学園から出ないように倒すために、私はこの学園に通うことになった。

生徒会執行部とは、昼の顔。夜は、聖かぐや学園所属妖獣討伐隊として、私は、毎日非日常を繰り返す。

1：プロローグ（前書き）

この物語は、竹取物語に出てくる「かぐや姫」を題材にしております。

ですが、この作品は、オリジナル作品です。

竹取物語と内容や表記が異なる場合がありますが、あくまでお手本として使わせていただいている、という事をご了承ください。

お願い申し上げます。

1：プロローグ

ある空想の日本のドが付くほどの田舎の山に、巨大な学園があった。東京ドーム4つほどの敷地に、私立の中高一貫校があり、周りにはスーパーやガソリンスタンドまで設置されている。ブランド品店まであるぐらいだ。

学園が小さな町のようになっている。活気に溢れ、人たちの笑い声で毎日賑わっている。

人と言っても、教員と店員と生徒達しかいないけど。全寮制だし。さすがにここに通うとなると、学費は普通の3倍以上かかる。

なので、別名「金持ち学園」。正式な名前は、ちゃんとあるが忘れた。

そんな学園に中等部から通っている私
—— 高宮 響 (たかみや ひびき)。

今年で高等部二年の私は、決して裕福な家庭に生まれてわけではない。

父は普通の営業サラリーマンだし、母は看護師の共働き。家は安い5階建てのマンションの2階。

普通の家庭に生まれた私が何故この学園に通えているのか、昔からの友人に聞かれた事がある。

理由をいうと、この学園の秘密に関わってくるので、その時は誤魔

化した。

だって、言ってしまったたら嫌われると思ったから。

「んー…くあつ」

今日も全ての授業が終わり、クラスの皆の話し声を聞きながら、軽く背伸びをする。

数学の教科書とノートをカバンに詰めて、自分のロッカーから2mぐらいの縦長の黒い袋を背中に背負う。

「あの、響ちゃん」

後ろから女の子の声が聞こえた。後ろを振り向くと、清楚な顔立ちのかわいらしい少女が居た。

綺麗な黒髪を三つ編みにした少女が少しオドオドとしながら、小さな紙を手渡してきた。

紙を受け取り、中の内容を流し読みしてポケットの中に突っ込む。

「今日、の、夜。いつもの場所で、待ってる、ね」

「わかった。それじゃあ、また今夜」

そういうと、彼女は軽く頭を下げて、小走りに教室を出て行った。
その後姿を見ながら、自分も同じように教室を出た。

部活に行く生徒や遊びに行く生徒達の波に逆らいながら、少し早歩きで寮向かう。

寮に行く間に、通り過ぎるクラスメートの女子に軽く手を振る。

あまり親しくは無いのだが、一応向こうがしてきたのだから、返さないと失礼だろう。

寮に入ると、寮長の生徒が私に気づいて話しかけてきた。

「高宮さん、今日もアレだったよね。これ、寮の入り口のスペアキー」

「ありがとうございます、先輩」

「いえいえ、今日も頑張ってたね」

「はい」

「夜食も、食堂の人に言ってるから安心して行っちゃい」

「はい」

用件を全て言い終えると、先輩は寮長室に戻っていった。
私は寮のスペアキーを握って、階段を駆け上がる。

10階建ての寮を最上階まで駆け上がり、1034号室の部屋の目の前に立つと、制服の内ポケットから鍵を取り出し、部屋の扉を開ける。

部屋の中には机と洋服ダンスと冷蔵庫とシングルベットしかない。
カバンなどを机の横に立てかけ、上着と首に付いたリボンを取り、壁に取り付けてあるフックに掛ける。黒いニーソックスを洗濯カゴに投げて、ベットに仰向けに倒れこむ。

ベットに置いてあるシンプルなデジタル時計を見て、約束の時間まで4時間以上あるのを確認して、目を閉じる。

そのままうとうとだして、眠りに落ちようとしたときに、いきなり部屋のチャイムが鳴り飛び起きた。

ゆつくりとベットから降りて、部屋の扉を開けると、扉の前に一人の少女が立っていた。

少し癖っ毛ある茶色の髪を小さくサイドテールにして、かわいらしいウサギのピンを前髪につけた少女は、いきなり目の前にスーパールの袋を差し出した。

「……何、これ」

「今週分の包帯や傷薬です！生徒会長から頼まれて、届けに来ました！」

「ああ、そういえば今日だった……。わざわざありがとう」

そう言いながら、彼女からスーパーの袋を受け取り、中身を確認する。

確かに、中には包帯や傷薬、絆創膏や消毒液などが入っていた。

「ん、確かに。ちゃんと受け取りました、と会長に宜しく」

「はい、それでは失礼します！」

笑顔で元気に走り去る彼女に軽く手を振り、姿が見えなくなると部屋の扉を閉めた。

そのまま机にスーパーの袋を置くと、タンスの中から下着やジャージを取り出し、部屋にあるシャワー室に入る。

軽くシャワーを浴びてサッパリすると、宿題があつたのを思い出し、机に座ってテキストを開く。

面倒だが、さっさと終わらせておこう。

数十分、机に向かい宿題を全て終わらせると、今度こそとベッドに飛び込んだ。

ベッドに入ると、すぐに睡魔に襲われ、その眠気に身をゆだねた。

どこか耳元で鳴るブザー音で、目が覚めた。
眠い目を擦りながら上半身を起こし、起きる原因になった携帯を掴む。誰かからメールが着たようだ。
画面を開いて、メールを開いてみるとその送り主の名前に驚いた。
さらに、その内容に驚いて慌ててベットに置いてあった時計を見ると、待ち合わせの時間の10分前だった。

眠りすぎた！

慌ててベットから抜け出し、タンスの中から服を取り出す。

普段着ているブレザータイプの制服の黒バージョンと黒いスカート。
黒いニーソックスを穿いて、机に立てかけていた縦長の袋と携帯を
掴んで、部屋を飛び出した。

携帯の時刻を確認しながら、寮の階段を駆け下り、入り口から待ち
合わせ場所まで走る。

待ち合わせ場所には、教室で会った少女や包帯などを届けてくれた
少女の他に、数人ほど立っていた。

走って息切れしかけている私に、私と同じような縦長の黒い袋を持
った男の先輩――

彌悠 晴（みゆう せい）が無表情のまま、私を見ていた。

「遅い」

「ごめん、なさい。少し、寝坊つ、しました……」

胸元を押さえながら、深く深呼吸していると、横から手が差し出された。

手のひらの上には、白いレース生地の手カチが載っていた。

「大丈夫、？少し、汗、かいてる」

教室で会ったあの三つ編みの同級生。天田 魅華（あまた みか）だった。

彼女とは中等部三年の時から友達だ。「大丈夫」と彼女に言うと、そのままハンカチを額に当てられた。

軽く顔を拭かれ、私は苦笑いしながら「ありがとう」とお礼を言う。彼女は横に首を振りながら、「いえいえ」と言って優しく微笑んだ。彼女も私と同じような黒い制服を身に纏っていた。

「ずりいっつ！響には優しいじゃん」

「うる、さい。耳元で、叫ばない、で」

彼女の隣には、同じ黒い制服を着崩し、髪の毛を金髪に染めた同級生。

天巳 涼祐（あまみ りょうすけ）が居た。彼とも中等部からの付き合いである。

そして、魅華と涼は親戚同士で小さい頃から一緒に育ったらしい。

ちなみに、涼は魅華のことが大好きでいつも彼女の傍に居た。魅華はそんな彼を好き、とは思っていないようだけど……。むしろ、苦手みたいだ。

「あの子達、いつもあれよね。いい加減、進展してくれないかしら」

「無理だと思いますよ？天田先輩が今の気持ちを变えない限り、絶対無理」

日本人形のような綺麗な長髪に、女性の私から見ても妖艶で魅力的な肉体の持ち主の、

咲華 焰莉（さきばな えんり）先輩と、包帯を届けてくれた中等部三年の、

師那 金系雀（しな かなりあ）が二人の様子を見ながら、ひそひそ話をしていた。

まあ、横にいる私に丸聞こえだからひそひそ話ではないけど。

「時間だ」

その言葉に今まで話していた全員が口を閉ざし、ある人物を見つめた。

私たちと同じように黒い制服を纏い、腰にレイピアを挿して、彼は笑みを浮かべていた。

彼はこの学園の生徒会長で、私たちのリーダー、白夜 紗那（び

やくや さな）。

容姿端麗で成績はいつも上位をキープし、運動神経も良く、さらに誰にでも分け隔てなく接してくれる事から、中等部の頃から生徒会長を務めている、私のクラスメートだった。

彼の斜め後ろには、眼鏡をかけ、いつも彼のサポートをしている、白夜 刹那（びゃくや せつな）先輩がいた。刹那先輩は、会長の兄で副会長である。

兄と言っても、実は同じ年らしい。書類の手違いで一学年上になってしまったと、本人から聞いたことがある。

「後、1分30秒ほどで0時だ」

刹那先輩にそう言われて、携帯の画面を開いてみる。確かに後、1分ほどで0時だ。

私は持っていた縦長の袋を地面に下ろし、チャックを下ろし、中の物を掴み出す。

中から自分と同じぐらいの長さの、槍のようなものが出てくる。だが、槍ではなく長い棒の先には大きな刃が付いている。

薙刀だ。

袋を折りたたみ、ポケットの中に入れておく。そして薙刀を持ち、もう一度彼の顔を見る。

他の人たちも、それぞれが様々な武器を持っていた。

彌悠先輩は、日本刀。魅華は、小さなダガーを数本。涼は、銀の二

丁拳銃。

咲華先輩は、鉄扇。金糸雀は、小型のボウガン。刹那先輩は、スナイパーライフル。

普通の学生が買える品物ではないし、法律で銃刀法違反で捕まるだろうが、この学園ではこれが普通だ。

この学園の中でのルールの一つなのだ。

こんなこと、友人に言えるわけ無いだろう。

言ったらそのまま警察行きだ。まあ、その事実は学園にもみ消されるだろうが。

そして、0時を知らせる鐘が鳴った。

「さあ、今日も学園の平和を守りに行くとしましょう」

生徒会長の言葉にその場にいた全員が頷き、二つのチームに別れ、散開した。

私は一人会長と向き合い、頭を下げ、町に向かって走る。

会長も私と同じように、一人で反対方向へと走って行く音が聞こえた。

さあ、私の非日常の始まりだ。

昼間の様な活気の無い寝静まった町を歩きながら、携帯の画面を見る。

携帯の待ち受け画面には、私と父と母の3人が映っている。父と母は笑っているのに、私だけ無表情で両親の間に挟まれていた。

この前の春休みに、実家に戻ったときに撮ったものだ。大切なお守り。

じっと眺めていると、突然携帯に電話が掛かってきた。涼からだつた。ボタンを押して、耳元に引き寄せる。

「響!!」

「——っ、大声で叫ばなくても聞こえてるから」

「あいつらが表門に大量に発生したんだ！俺と魅華と先輩じゃ、突破される！手伝ってくれ」

「了解、すぐに向かう」

携帯をすぐに閉じて、ポケットに入れながら走る。

毎日毎日、あいつらも飽きない物だ。それは私達にも言えることだ
けど。

だが、立場が違う。あいつらは逃げる。私達は追いかけて捕まえる。
捕まえるより、倒す。のほうが正しい。

数分ほど全速力で走ると、何かを切る音と銃の撃つ音が聞こえた。
目を凝らすと、彌悠先輩と涼が門の前に蔓延っているゼリー状の物
体を、切ったり撃ったり蹴り飛ばしたりしていた。

門の上には、魅華が門から出ようとしている黒い飛行物体をダガー
を投げて地面に落としている。

上からどんどん落ちてくる黒い物体に向かって走り、薙刀で真つ二
つに切る。

地面に這いずって門に行こうとするやつも、真つ二つに切り、動き
回る緑色のゼリーに向かって蹴る。

ゼリーがドミノ倒しのように倒れていくのを見ると、後ろに涼
が来た。

「助かったぜ、俺達だけだと門の上を抜けられそうだったからな」

「今日は特に多いのかもしれない。昨日の倍以上が来てる」

「だろうつ、な！」

涼が横から飛び掛ってきた、蝙蝠の様な動物の頭を撃ち抜く。私も横から飛び出してきたゼリーを切り、野球のように薙刀で遠くまで飛ばす。

「天巳、高宮、上から来るぞ！」

「了解！って、うわっと」

彌悠先輩の声が聞こえた瞬間、私達に向かって何かが落ちてきた。すばやくその場から離れ、落ちてきた物を確認する。見た瞬間、思わず薙刀をそいつに向けて投げた。見た目に反してすばやく逃げた物体は、ゼリーに蝙蝠の羽と、頭にキノコを生やしたような形をしていた。色も街灯で見えた。全て、紫色だ。

「うわゝ、今日のはいつもよりグロテスクな奴だな」

「呑気に言わないで」

「響、ちゃん！大丈夫、だった？」

門の上から魅華がゆっくりと降りてきた。降りるとすぐに私の傍に来て、ダガーを構える。

隣で涼が「俺の心配はしてくれないの！？」と、銃の残弾を補給し

ながら叫んだ。

後ろを振り向くと、彌悠先輩が刀を納めながら歩いてくるのが見えた。

私も地面に突き刺さった薙刀を抜き、構える。

「やっぱり、あれ言わないと駄目？」

「そりゃあ、当然でしょ！会長が決めた事なんだから」

「がっ、頑張つて、響ちゃん」

「さっさと終わらせろ」

私は軽く体から力を抜くと、息を吸い込み、薙刀を敵に向ける。

「生徒会執行部、並びに、聖かぐや学園所属妖獣討伐隊、参る！」

これが学園の秘密と、私がこの「聖かぐや学園」に通えている理由だった。

1：プロローグ（後書き）

新連載です。実はこういうの前から書いてみたかったんです。
こちらは、私一人で執筆していこうと思います。

よろしくお願いします^^

2：ラブレター？ファンレター？（前書き）

扇風機をつけても暑くなってきましたね。

ノートパソコンで小説を書いてる最中、熱で勝手にシャットダウンしましたw

そのせいで何度下書きのデータが消えた事か…orz

ちよつとぐだぐだ話になってますが、どぞ。

2：ラブレター？ファンレター？

五月中旬、少し遅れ気味の梅雨の時期。今日も外は大雨だった。雨の日はどういった理由かわからないが、妖獣が現れないからゆっくりと一日が過ごせる。

私にとって、雨は嬉しい。だけど、クラスメート達は朝から「早く晴れないかなあ」と、ずっとその話ばかりしていた。

ある人は、窓にでてる坊主をかけて真剣に祈っていた。

絶対に雨に濡れない人たちなのに、何故晴れになって欲しいんだろう。

私はクラスメート達から目を離し、窓から外を見る。見ていると自然とあくびが出た。

魅華がいないと、暇だ。

「ふあゝ……………」

「あの…高宮さん」

「…………ん？」

クラスメートの女の子が、遠くから私の名前を呼ぶ声が聞こえた。窓から声の聞こえたほうへ顔を向けると、教室の入り口に私を呼ん

だ女の子と普段姿を見せない珍しい人が立っていた。
小走りで彼らのところへと向かう。

「授業受ける気になったんですか、会長」

「全然。ちょっと、用事があつたから来ただけですよ」

いつも生徒会室に引きこもりがちな、生徒会長だった。
私の質問に即答した彼は、クラスの中の人たちに向かって軽く手を振る。

それだけで、クラス的女子から黄色の悲鳴が聞こえる。その声の大きさに、思わず耳を両手で塞いだ。

彼はくすくすと小さく笑い、私の目の前に小さな紙を差し出した。

「今日のスケジュールです。後、アレの点検をするので、生徒会室に集合してください」

「集合時間は」

「すぐにでも」

彼は全て伝え終わると「他の部員にも渡さないといけないので、また後で」と、さわやかな笑顔で教室を去っていった。
その笑顔で、教室の中から「女子が倒れたぞー！」という声が聞こえた。

さすが会長だ、と呆れた。

私はできるだけ授業に参加したいほうだけど、彼はそんなのお構いなし。

まあ、彼は頭がいいし、テストはいつも100点だからいいだろうけど、出席日数はどうにかできるようだし。

私は、頭が良いというわけでもないし、出席日数とノートだけは取らないといけないのに。

生徒会のメンバーの中で真面目に授業に参加しているのは、私と剎那先輩ぐらいだ。

魅華は体が弱くて、ほとんど保健室だし、涼の場合は授業〓寝るもの。

咲華先輩と彌悠先輩とかなは、会長と同じく部室にいつもいる。

「はあ……行くか」

どうせ逆らう事はできないのだし。私は、渡された紙をポケットに入れて自分の席に戻る。

机の上に広げていた教科書やノートなどをカバンに入れて、ロッカーから雑刀の入った袋を取り出す。

そのまま教室を出ようとした時、先生が教室に近づいているのが見え、頭を下げる。

それだけで察してくれたのか、先生は手を振って教室の中に入っていた。

「あの、高宮さん」

急に名前を呼ばれて、顔だけ後ろを振り向く。すると、ついさっき私を呼んだ女子生徒が立っていた。

胸の前で両手を合わせながら、何故かもじもじしている。

「何？」

「あの、これから生徒会の方へ行くのよね」

こくりと頷く。

すると、いきなりカバンを持っていない方の手を握られ、助けを求めるような目で見られた。

「お願いがあるの！聞いてくれない…かな？」

「…まあ、内容にもよるけど…」

「ありがとう！実は生徒会の皆さんに、これを渡して欲しいの」

そう言っただけで彼女はロッカーから、大きなダンボールを一つ持ってきた。

「何これ」

「この説明はこの封筒の中に書いてあるよ。あつ、でも別に変わったものじゃないからね?!」

「ん、わかった」

私はダンボールの上にカバンを置き、両手で持ち上げて、封筒を上
に載せてもらう。

「寮の方にお礼置いておくね。何がいいかな」

「授業のノートを貸してくれたら、それでいい」

「それだけでいいの？じゃあ、寮のえつと……」

「1034号室の前にも置いておいて。明日、返すから」

「あつ、うん。わかった」

「それじゃ」

私は、そのままダンボールを持って教室を出た。

丁度良く、授業の始まるチャイムが鳴り、廊下に居た生徒達が急い
で教室に戻っていった。

それを横目で見ながら、上の階に上がる階段を上る。

生徒会室は、高等部校舎の5階にある。私がいつもいる教室は、一
つ下の4階だった。

微妙に金で装飾された階段を上がって、すぐ横の扉を開く。

「来ましたか、待っていましたよ」

「先輩！どうしたんですか、それ」

「大荷物ね」

「響ちゃん」

「よっ、響」

「……」

そこはすでに生徒会室。

床はタイルではなく絨毯が敷かれ、その上には豪華なテーブルや椅子。さらに置くに、彼らのいるソファとテーブルがあった。

この校舎の5階全てが、生徒会の部室だ。さすがに広すぎて、教室一つ分だけ貰い、他は物置などや会長の私室となっている。

私は、テーブルの上にダンボールを置き、封筒を開く。
横から、かなが興味津々でダンボールを見つめていた。

「えっと……クラスの女子生徒から私達に渡してくれ、と頼まれたものです」

「中身は何かしら？お菓子だとうれしいわね」

「さっそく中身を開けてみましょう！」

「その前に、手紙があるので読ませてもらいます」

私は軽く手紙に目を通して、一度ため息を付いてから、手紙に書かれている内容をそのまま読み上げた。

『このダンボールの中身は、私達「生徒会ファンクラブ」からの皆さんに向けたファンレターです。それぞれ、リボンで結んでいますのでわかりやすいと思います。白夜紗那様が青、白夜刹那様が緑、彌悠晴様が紫、咲華焰莉様が赤、師那金糸雀様が黄、天田様と天巳様は少なかったので一つにまとめて黄緑、高宮響様が水色、となっております。ファンクラブ、2834人。誠意を込めて書かせて頂きました。どうか、受け取ってください』

「……だそうです。ほぼ、全校生徒全てが私達に向けて書いたものらしいです」

手紙を読み終えて、封筒に収め、ダンボールを開く。

確かに中にはリボンで結ばれた、沢山のカラフルな手紙が入っていた。圧倒的に、会長と副会長の物が多いけど。

「えー、つまらない。ファンレターとか、要らないよ」

「でも、せっかく書いてくれたのよね。まあ、少しだけなら読みましょうか」

「というか、何で俺と魅華のは少ないんだよ！おかしいだろ」

「うるさい、耳元で、叫ばないで。うつとお、しい」

「……さつさと終わらせるか」

それぞれが自分宛に送られてきた手紙の束を取っていく。

最後に私に送られてきた手紙をダンボールから取る。大体、40通くらいだろうか。

一つ目の手紙の封を切る。中の便箋を開いて、軽く流し読みする。

内容を簡単にまとめると

『好きです。いや、愛してます！付き合ってください！（女ですけど、大丈夫ですよね？）』

私は女の子は恋愛対象にできません。大丈夫じゃないです。

二つ目の手紙の封を切る。最初は、こう。

『先輩って、甘い物が好きですか？今度、お店に出す新作スイーツを試食してもらいたいです』

最初はその誘いを受けようかな、と思った。だけど、手紙の端に小さな文字で

『あの、白夜先輩も誘ってみてくれませんか？』

ああ、なるほど。と思った。口実か。

二つ目の手紙には返事を書くことにして、次の手紙を開く。

だけど、その手紙の内容も一つ目の手紙と同じような物で、それが37通。

私は、39通目の手紙を握りつぶしながら、軽く涙が出そうだった。

「モテモテですね、先輩」

「女の子にだけどね」

「まだ、響ちゃんは、いいよ？私なんて、2通だけだったんだもん」

「でも、2つとも男子からだったよね」

だって、すぐに涼が魅華から手紙を奪ってビリビリに引き裂いたんだから。男関係に決まっている。

私は大きいため息をついた。

「なんで昔から女子ばかりに好かれるんだろう…」

「『性格』『』」

即答された。

性格が女らしくないのだろうか。

男に絡まれて困っていた女子生徒を助けたり、重そうな荷物は率先して持つし、クラスの男子と比べると……。

でも、甘いものは好きだし、可愛いものも好き。髪は短いけど、ち

やんと手入れはしている。

なんで、昔から女子に好かれるんだらう。

実は、小さい頃から同姓に好かれるようになっていた。恋愛対象に見られて、中等部の時に一度、部屋までおしかけられた事がある。大人数で。

その時は、咲華先輩と魅華が助けてくれて一時的に逃れる事が出来たけど、寮から抜け出して、夜の学校の校舎を半裸で駆け上がった、部屋に飛び込むはめになった。

後日、部屋におしかけてきた女子生徒たちが、謝りに来てくれたけど、怖くて一緒に居た会長の後ろに隠れていた。

もう、あんな事は体験したくない。アレ以来、作り笑顔さえもできなくなった気がする。

もう諦めが9割を占めながらも、最後の一通の手紙の宛名を見る。

『高等部1 - 3組 望月 翔太』

体が硬直した。

「もしかして……男からか？」

「たぶん、だけど。名前からして男だと思う」

「ふん……」

おそろおそろ封筒を開けようとして、誰かに取られる。

消えていったほうを見ると、会長が満面の笑みで、片手に手紙、片手にドアノブを握って

「没収です」

彼は部室から姿を消した。

数秒ほど呆気に取りられ呆然としていると、涼に肩を激しく揺さぶられてようやく気づいた。

すぐに会長の後を追うように外に出ると、すでに姿が見えなくなっていた。

階段を下りようと下を覗くと、下の階で会長がこちらを見ながら手を振っていた。

「会長、返してください」

「嫌です。返して欲しかったら、僕を夜までに捕まえてください」

会長はそういうと、姿をまた消した。

「絶対に返してもらいますからね、会長」

それから数時間、私は会長を追って、校舎中を走り続けた。

2：ラブレター？ファンレター？（後書き）

3：鬼ごっこの結果（前書き）

更新の期間がものすごく開いてしまい、申し訳ありません><
下書きが無かったので、考えがなかなかまとまらず、短くなってしましました。

それでもいい方は、どうぞ^^

3：鬼ごっこの結果

ようやく会長を追い詰めたのは、学校の終わりを告げる鐘が鳴ったときだった。

追い詰めた場所は、何故か私の寮の部屋の中。

それも、ベットのう上だ。私は会長をベットの端に追い詰め、足を掴んでいる。会長は抵抗をせず、いつもの営業スマイル。

「会長、何で私の部屋の鍵を持ってるんですか」

「生徒会メンバー全員、貴女の部屋の鍵を持ってますよ」

私にプライバシーは無いのか。というより、校則違反でしょ。鍵の複製なんて。

「生徒会長にやれないことは、ない」

ドヤ顔で言われた。少しイラッとする。それを表情に出さないようにして、会長の目の前に手を差し出す。

「手紙、早く返してください」

会長は一度キョトンとした顔になったあと、「ああ」と呟いてポケットの中からシンプルな封筒を取り出した。

すばやく取るうとすれば、すぐに別の場所に移動される。両手が使えれば楽なのだが、今片手は会長の足を捕まえている。離したら、逃げられる。

「んゝ、簡単に返しても面白くないですからねゝ」

「普通に返してください、それは私に送られてきた手紙です。持ち主に返してください」

「嫌ですよ。僕がなにも利益がないじゃないですか」

「無くてもいいですっ」

言い争っている間も、ずっと手紙を取り返そうと必死に手を伸ばすが後一步のところで逃げられる。

「———そうだ、いい事思いつきました」

「はっ？———っ！！」

彼は突然顔を近づけてきて、私の顔の目の前に手紙を差し出した。

彼の顔はなにか企んでいる様な顔だった。

私は突然鼻先まで顔を近づけられた事に驚いて、ただ黙っていた。

「キスしてください」

「……はあ？」

何を突然言い出すんだこの人は。思わず足を持つ手を離してしまった。

離れた瞬間、いきなり手を？まれ、押し倒される。

布団の柔らかい感触を背中で感じ、とっさに起き上がろうとするけど、両腕を彼に掴まれ上手く起き上がれない。

目の前には、手紙をひらひらと私の目の前で見せながら笑う、彼の顔。

「手紙を返す代わりに、キスをください。もちろん、口に」

「……さすが会長ですね。私には思いつきませんでした」

皮肉を込めながら言うと、彼は「褒め言葉として受け取っておきますよ」と言っただけで顔を近づけてきた。

ため息を付きながら、私は顔を横に向ける。耳元に彼の息がかかる。私は枕の横に置いていた時計を見て、もうそろそろかな、と心の中で呟く。

「……なんで横を向くんですか」

「…後でどうなってもいいんですか？」

「どっ、というと？」

そう彼が不機嫌な声で呟いた途端、部屋の扉が勢い良く開く音が聞こえた。

「失礼、します!!」

そう言って入ってきたのは、魅華だった。走ってきたのか制服が少し乱れ、額には汗を掻いていた。普段の彼女とは、大違いだった。

「魅華」

名前を呼ぶと、すぐにこっちに向かってきて会長の肩を掴むと普通の女子とは思えないような力で

「何、してるんですか!!退いて、くだ、さい!!」

「!？」

突き飛ばした。そのまま会長は壁に頭が当たり、鈍い音が聞こえた。私は「大丈夫！？何も、されて、ない??」と魅華に体を触られながら、そんな彼を見ていた。

彼は体を震わせながら、自分の頭に触れながら起き上がった。

その表情は、怒り。

魅華は起き上がった会長の睨みつけながら、私を強く抱きしめた。

「たとえ会長でも、響ちゃんに危害を、加えるなら、容赦しないで
す！」

「…退学にされたいようですね…」

「生徒会長に、そんな権限、は、ないはずですよ」

二人の間に火花が散っている。

私はその光景にため息を付きながら、魅華の腕の中から離れた。
魅華はそれをきっかけに、会長と口喧嘩をし始めた。

「響ちゃんは、会長みたいな、女たらしには、渡しません！」

「女たらしとは、酷い言われようですね」

「実際、そうじゃない、ですか！この前も、部室に女生徒と一緒に、
裸で寝てた、じゃないですか！」

「彼女が誘ってきたのですから、仕方なく寝ただけですよ」

「次の日は、別の人と寝てました、よね。それが、仕方なく？」

「あれは、こちらが誘ったんですよ。暇で仕方なかったので、遊びですよ」

「女の敵。会長と一緒に寝た、彼女達が、可愛いそうです」

「それでも、彼女達は嬉しそうでしたよ？」

「普通は、そんなこと、ありえません！！」

いつまでも続きそうな口喧嘩に、耳を塞ぎたくなる衝動に襲われながらも、近くに手紙があることに気づいて、すばやく取って、部屋の外に出た。

部屋の外に出て扉を閉めるだけで、中の声は全く聞こえなくなった。扉にもたれ掛るように廊下に座り込んで、一息つく。

「疲れた……」

そついいながら、シンプルな手紙の封筒の宛名を見る。

「望月……翔太」

どんな人なんだろう、と名前から姿を予想してみる。
だけど、全然思い浮かばず、諦めて中の手紙を読んできた。

『初めまして、望月翔太もちつきしょうたといいます。

中等部の頃から、先輩の姿を見ていつもカッコイイなと思っています。

実は、先輩に少し相談したい事があります。

本当はこの手紙に書くことと思ったのですが、他の人に見られてしまったら困る内容なので、下に僕のメアドと電話番号を書いておきます。

いつでもいいので、どうか連絡ください。』

手紙の下の方を見ると、確かに番号とメールアドレスが書いてあった。

ポケットの中から自分の携帯を取り出して、番号を登録しておく。

「連絡するのは、また今度でいいかな」

そう呟いて、携帯をポケットにしまう。

走り続けて疲れたのか、眠気が襲ってきた。さすがに廊下で寝るのはいけない、と思ったけど、すぐに瞼が落ちてしまった。

眠いの耐えられず、そのまま廊下で眠ってしまった。

その頃、部屋の中では凄まじい光景が繰り広げられていた。

「響ちゃんは、綺麗で、優しくて、会長にはもったいないです!!」

「それは、天田さんにも言えることですよ。おっと」

「私は、響ちゃんの、親友だから良いんです!」

「独り占めはいけませんね。よっ、と」

部屋の壁には沢山のダガーが突き刺さり、窓ガラスは割れ、床には沢山の物が散乱していた。

その中で二人は、戦いを繰り広げていた。

魅華がダガーをすばやく投げるたびに、紗那はそれを避け続ける。そのたびに、部屋の中が壊れる。その繰り返しだった。

「あはははははっ、どうしたんですか?その程度の力でしたか」

「チツ、会長が、常人より速いのが、いけないんです、よ!!」

「可愛くないですね。どうしてこんな人を天巳君が好きなのか、全く分らない」

「そんな事、私に言わないで、本人に言ってください!」

「そうですね。これが終わったら、明日ぐらいにでも言っておきますよ」

その戦いは、魅華のダガーの残りが切れるまで続いた。

その間に部屋の外では、魅華を追って来た涼と刹那と金雀糸が、扉の目の前で眠っていた響を見て、驚きながらも部屋の扉に耳を澄ませ、状況を理解して、ため息を付いた。

そのままにしておくのも風邪を引いてしまうため、涼と金雀糸はその場に残り、刹那が響を背中に背負って、生徒会室に戻って行った。

3：鬼ごっこの結果（後書き）

次の更新はもつと期間が開くと思います。

でも、早めに更新できるよう頑張ります！< ;

4：妖獣を呼びしモノ（前書き）

4：妖獣を呼びしモノ

生徒会室に運び込まれ、ようやく目を覚ました私は紗那と魅華の二人が帰ってくるまで、手紙を送ってきた『望月翔太』にメールを送ってみる事にした。

もう6時を過ぎているから、寮にいるかまだ部活のほうで活動しているかもしれない。

迷惑になるかもしれないが、一応「手紙、受け取りました」とだけ送った。

メールを送って一息付きながら、会長の買った高級ソファ（100万相当）に座る。

さすが高級なだけある。座り心地がものすごく良い。

家にある安いソファ（3000円程度）と比べると、座り心地は雲泥の差がある。

見た目も違いすぎるけど。

「はぁ……………あつ」

少しため息を付いたところで、思い出した。

そつえば、扉の前に何か荷物が置いてあったような……………ノートかもしれない。

鞆はここに置いたままだったから、ノートだけ回収して戻ってこよう。

ついでに二人の様子を見てみよう。

同じ部屋で読書をしている刹那先輩に、「少し部屋に戻ってきます」と言つと何故か「気をつけて行つて来い」と言われた。

学園の中は妖獣を除いたら、私にとって平和そのもののなに何を気をつけることがあるんだろうか。

と、頭の上にハテナマークを出しながらも頷いて、寮のほうへ歩いていった。

寮に向かおうと上履きから革靴に替えている時、見知らぬ女子生徒から声をかけられた。

慌てた様子で、何を言いたいのかが分からなかったが、「寮」と言つたのが聞こえた。

彼女を落ち着かせて、私は寮のほうへ向かつただけけれど……。

「人ばかり？何でこんな所に……」

寮の前にある広場に人ばかりが出来ていたのだ。

この広場を通らないと寮に行けないのに、なかなか通り抜ける事が出来ない。

「はあ、仕方ない……遠回りするか」

何度か挑戦して失敗したため、広場を少し遠回りして寮に戻る事にした。

広場を出て5分ほど歩き、歩いた先にあつた細い道を左に曲がる。この道は、用務員が使つ運搬用の道だ。この道を使えば、寮の裏口

に出る。

中等部の頃、用務員のおじさんに教えてもらった道だ。

だけど、街灯や明かりになる物が無いのが少し不安だった。最近、夜になると周りが見えなくらい暗くなる。たとえば、満月だとしても微かに道の端が見える、という感じなのだ。

今は携帯を明かり代わりに歩いているので関係無いが、中等部3年間携帯も無く、明かりが無い状態で帰ろうとした時は………本当に怖かった。

いつもの様に歩いていると、突然何かが目の前を通り過ぎた。

「?!」

思わず差していた傘を手から落としてしまった。だが、ついさっきまで大雨だったのに突然雨が止んでいた。

不審に思い、目の前を通っていったものが行った横道に入ってみた。道を進むたび、何かに見られているような気がしたが、気にしないようにした。

10分ほど一本道を進んだだろうか。洞窟のような場所についた。

「何でこんな物がここに……自然にできたのかな」

洞窟の奥を覗き込むように見ると、何かが飛び出してきた。条件反射で咄嗟に横に体をそらすと、耳元でジヨキツと切れるような音が聞こえた。

「何っ?!」

後ろを振り返ろうとすれば、すぐ顔の目の前に来る。今度は後ろに後ずさり、相手の動きを止めるため、携帯のカメラのフラッシュを使った。

光で一瞬動きが止まったのを確認すると、洞窟の中に飛び込んだ。

遅れるように後ろを追って来る何かから逃れるために、わざと入り組んだ道を選んで走った。

行き止まりになる可能性もあったが、そんな事考える暇は無かった。徐々に距離を詰めてくる何かから逃げるのに、必死だった。

走り続けていると、いつの間にか行き止まりに来てしまっていた。戻ろうとしたが、すでに後ろから音が響いてきた。

「くっ、どうにかしないと……」

壁に背を向けながら後ずさると、壁があると思ったのに体が通り抜け、頭を勢い良く地面に打った。

「!! 痛っ……」

少々涙目になりながら頭を上げると、何かが黄色く光っているのが

見えた。

不思議に思い、近寄ってみるとそれは巨大な卵のようなものだった。触れてみると、ほのかに温かい。生きているかのようにだった。だけど、中に浮かんでいるものはありえないモノだった。

「人間…？それも、赤ちゃんだ」

生後3ヶ月ぐらいの赤ん坊が、卵の中で小さく丸くなって浮かんでいたのである。

金髪の髪から、光が漏れている。

その姿の神々しさから、見とれていると後ろからペタツという音が聞こえて、後ろを振り返る。

ようやく、自分を追いかけてきていたモノの正体が分かった。

ソレは、犬のような体に蛇のような頭、両手が蟹の鋏を持っている、妖獣だった。

だが、こんな時間に妖獣は現れないはず……。

妖獣が姿を現すのは、決まって0時以降からなのだ。

雨の日以外は出現する妖獣。今の時刻を携帯で確認してみると、まだ8時になる5分前だった。

「何故こんな早い時刻に現れる」

だが、そんな事より今はこの卵を守る事を優先した。
敵は私だけを見ているようだから、この場から離れば大丈夫なはずだ。

ゆっくり卵から距離を開いていく。が、妖獣の顔はこちらに向かずただまっすぐ顔を向けていた。

「？」

全く動こうとしない妖獣を見て、警戒するのを止め、目の前に立つてみるが、ピクリとも動かない。

触る事はしなかったが、全く動かないため不思議に思っていると、後ろから見られているような気がした。

後ろを振り返っても卵がある以外は、何も無い。

もう一度卵の中を覗いてみると、瞳を閉じていたはずの赤ん坊が目を開いていた。

しかも、じっと私を見ながら手を動かしている。

そっと、赤ん坊の手に重なる様に卵に触れると、赤ん坊は嬉しそうに無垢な笑顔を浮かべた。

今にも、かわいらしく笑う声が聞こえてくるかのようだ。

「君は、誰？」

そう赤ん坊に言ってみる。けれど、赤ん坊は首を傾げるだけで何も分らない。

何故、こんな所にいるんだろう。どうして、卵の中にいるのか。不

思議だった。

じつと、赤ん坊の顔を眺めながら頭の中で考えを廻らせていると、いつの間にか妖獣が横に来ていた。

驚いて、後ろに下がると妖獣は一度私を見て、今度は赤ん坊を見上げていた。

そして、卵に体を摺り寄せた。

「えっ」

思わず、声が出るほどに驚いた。

まるで親に甘えるかの様に、妖獣が体全体を使って卵に擦り寄っていたのだ。

こんな行動、今まで見たことが無い。

さらに驚いたのは、赤ん坊が妖獣を見て笑っていることだった。楽しそうに、そして嬉しそうに笑う姿は、歪に見えてしまった。

後ずさりながら、その場から離れようとすると、足に何かが引っ掛かった。

「うわッ」

体勢を崩し、勢い良く後ろに尻餅を付いてしまった。

だけど、痛みは無く、反対に柔らかな感触がした。

下を恐る恐る見てみると、この前倒したはずの『きのこゼリー』の小さい奴がいた。

あの、ゼリーに蝙蝠の羽ときのこを生やしている奴だ。その体の上に、私が座り込んでいる状態になっていた。よく見ると、私を取り囲んで大量に姿を現している。

（気持ち悪っ……！！）

立ち上がろうとすると、ゼリーを踏み潰しそうになって、恐ろしくて立ち上がることが出来なかった。

そのままの状態で座っていると、突然下にいたゼリーが動き出し、体が揺れた。

「えっ、えっ ええええええええええ！?!?」

奇声を上げながら、ゼリーの上で何も出来ず必死に体のバランスを取っていると、また卵の前に戻ってきていた。

卵の中にいる赤ん坊を見ると、大きく口を開いたまま泣いていた。母性本能がくすぐられ、赤ん坊に触れるように卵の表面を撫でた。泣き止んで欲しい、そう心の中で思いながら、卵を撫でる。

すると、赤ん坊は泣き止んでまた笑顔を見せた。

「君は、とても不思議な子だね。まるで、妖獣の主みたい」

そういうと、赤ん坊は私の言った事がわかったようで、少し困ったような顔を見せた。

まだ赤ん坊なのに、感情豊かだなあと感心していると、胸ポケットに入っていた携帯のブザーが鳴った。

携帯を取り出してみると、魅華から電話がきていた。ボタンを押して、耳に当てると大きな声で叫ばれた。

「響ちゃん……！」

「——ッ、聞こえてるよ。どうしたの」

「どうしたの、？じゃないよ！！今、どこに、いるの？」

「どっつて………」

そういえば、ここはどこなんだろう。

あの道を歩いてきて、横道に逸れたら洞窟がありました。その中にいるなんて、わかるだろうか。

それより、この場所を知らせても大丈夫なのだろうか。

もし、会長にばれたらこの赤ん坊が殺されてしまうかもしれない。

あの人は、化け物だと思ったらすぐに消去しようとする人だ。

とっさに、嘘をついた。

「あつ、ちよつと街に買い物に行ってるんだ。少し必要な物があった」

「だから、街の、どこ？すぐに、行くから」

「門のすぐ近くにある、コンビニの前。そこが一番近い」

「分かった、すぐ、迎えに行くから」

そう言って魅華はすぐに電話を切った。
これは、急がないとまずいかもしれない。間に合うか。

「また、来てもいい？」

卵の中にいる赤ん坊にそう言っつと、笑顔で頷いた。
そして、手を振ってくれた。バイバイ、と言っつてくれているんだろ
う。

私も手を振り返すと、赤ん坊はどこから出てきたのか分からない、
巨大な蛙を指差した。
巨大な羽の生えた蛙が、私を一度見て「背中に乗れ」と言っつたよう
に首を曲げた。

赤ん坊と蛙を交互に見て、信用しても大丈夫なのか、と思いつながら
も急がないと魅華が来てしまったため、いちかばちかで蛙の背中に乗
つた。

私が乗ると、蛙はすぐに走り出し、蛙とは思えない速さで洞窟を抜
けた。

必死に蛙の体にしがみついていると、今度は浮遊感に襲われた。
顔だけ蛙から離すと、下に学園が見えた。

「はっ？」

蛙は空を飛んでいた。

羽を大きく広げ、羽ばたきながら学園の上を飛んでいた。
驚いたのもつかの間、蛙は急降下を始めた。

「！！！」

慌てて蛙にしがみ付き、風の音を聞きながら怖さから目を閉じた。すぐに浮遊感は無くなり、恐る恐る目を開けると、すでに学園の入り口の前に下りていた。

周りに人影は無く、ホッと息をついて蛙からおりた。

「ありがとう、助かった」

そう言って蛙の頭を撫でると、蛙は「ゲコッ」と一鳴きしてすぐまた空に浮かび上がって、飛んでいってしまった。

蛙の姿が消えたのを確認してから、私はコンビニに走った。

コンビニの前で少し待っていると、魅華が走ってきて抱きついてきた。た。

後ろから会長達も走ってきて、お説教をされてしまった。だけど、私は不思議と後悔はしていなかった。

あの赤ん坊の姿をずっと心の中に思ったまま、私は寮へと戻って、自分の部屋の悲惨な姿に直面して、いつの間にか会長の鳩尾に拳を

入っていた。

その後、会長は一週間ほど学園に顔を出さなかった。
原因は、私。だけど、私は心の中で（ザマアみる）と笑った。

5：文化祭準備期間その1（前書き）

下書きがないと更新が遅い。何日も悩んでいると、前回から10日以上経ってました。
もうしわけありません。

今回から学園らしい話に入っていきます。

5：文化祭準備期間その1

あの赤ん坊と出会ってから、一週間が過ぎ、さらに2週間が経った。その間にテストがあつたり、朝まで妖獣を倒すためになったりと、忙しい日々だった。

だが、私達生徒会執行部は今、ある行事の準備で忙しかった。生徒会室では、行事の計画を決める会議が開かれている。代表は、生徒会長。

「さて、皆さん。集まってもらった理由は、わかりますよね？」

「今年も、やるんですね」

ため息を付きながら言つと、隣に座っていた咲華先輩がこそりと耳打ちをしてくる。

「あら、響ちゃんはイヤなのかしら」

「嫌です」

「即答なこと。まあ、しょうがないじゃない。伝統なんですもの。諦めましょうよ」

「無理です」

「その二人、私語禁止」

会長の隣に座っているこの学園の校長に、満面の笑みで言われた。
ちなみに、名前は白夜 涙（びゃくや るい）。生徒会長達の伯父で、保護者でもある。

実は、ものすごく苦手である。

「さて、今年もアレを開催しようと思います。名前も少し変えて――」

「名づけて、『かぐや姫争奪戦』お目当ての姫を捕まえるのは誰だ！？」。企画は私が全て考えたよ」

季節間違ってる。完全に季節違う。

かぐや姫に係る季節は秋。今は夏に入る手前。全然違う。

「不満、意見などは全部拒否します」

理不尽だ。

「前半は文化祭が主。ですが、後半はかぐや姫争奪戦を学園全ての敷地を使って、行います」

「ルールは昨年と同じく、極秘で決められた、どこかに隠れている数十名の姫を男子生徒は見つけ、彼女達の願いを多く叶えた人に賞金が出ます」

「もちろん、生徒会の皆さんも例外ではないですよ。参加してもらいます」

「まあ、準備などは白夜の家、総出で行うので、皆さんは気長に過ごしてください」

「ちなみに、今年の姫はこのリストの生徒達です」

そう言つて、配られたリストに軽く目を通す。

顔の写真付きのリストをめくるたび、美女。その中には、咲華先輩とかなが入っていた。

毎年、彼女達は選ばれている。この前のラブレターの総数を考えると、当然だと思う。

だけど、何故その下の紙に私の名前がある。

「あら。今年は響ちゃんも出る事になったのねえ」

「……」

「あら、反応無し。でも良かったじゃない。これで男子達にモテてるって証拠になったじゃない」

「……そうかもしれないですが、正直言つと……」

面倒。やりたくない。そんな感情のほうを上回っていた。

一度、中等部3年の時、姫に選ばれた事があった。だけど、周りの女子は美女で綺麗に着飾っているのに、自分は女性らしい服装が似合わなくて、スーツのような質素な服を着ていた。

そうしたら、男子ではなく女子に追い掛け回された。

デジカメや携帯のカメラを向けながら走ってくる女子生徒から、逃げるのに必死だった記憶しかない。

まあ、それ以降選ばれる事が無く、平和に文化祭を過ごす事が出来たのだが……。

「……はあ」

「大丈夫ですよ！今年は精一杯、先輩を綺麗なお姫様に見せますから！」

「あつ、ありがとう。かな」

かなの優しさが何故か心にグサリと刺さった気がした。

どうせ、胸も小さいし身長高いし髪短いから、男子にしか見えないよ……。

「響ちゃん。そんなに、落ち込ま、なくても……」

「落ち込んでてもしょうがないけど、衣装の事を思うと……」

「それなら大丈夫ですよ。生徒会メンバーの衣装は全て制作済みで

す」

「もちろん、サイズはピッタリのやつをね」スリーサイズ、靴のサイズまできっちり作っておいたから」

どうやってスリーサイズを知った!?

「見ればわかるからね」。学園長に掛ければこんな事、朝飯前だよ」

さすが変態。見るだけでわかるとは……。変態の粋を超えているか?

「響…声駄々漏れだぞ」

涼にそう言われて、思っていた事が口に出ていた事に今更気づく。だが、学園長はニコニコと人の良さそうな笑顔を浮かべながら、リストを見ている。

この学園長にしてこの会長ありだな、と会う度に思う。

笑顔の性質が全く正反対の二人だが、さすが血が繋がっていると誰もが確信するほど、同じような行動をとる。似たもの同士だが、どこか違ってしている様に感じる。

刹那先輩は「本当に会長の兄?」と疑われるほど、冷静沈着で鬼畜でもある。

でも、独占欲が強いのは彼らと同じなのかもしれない。

さすが白夜家。

「衣装は男性女性、それぞれ3種類ずつ用意してある。当日まで隣の部屋で管理しておく。後で確認して、当日どれを着るか2日後までに決めておけ」

「あれ、今年は男子も着るんですか？去年は制服じゃなかったですか？」

「男子生徒は男子生徒でイベントがあるんだ。そのための衣装だ」

「初の試みですか。いいですね、かな、楽しみです！気合入っちゃいました！」

喜んでいるかなだったが、私の心は不安で一杯だった。

学園長が考える物はろくでもない事ばかりだ。まともだった物が無い。

ある年は生徒全員でコスプレ。またある年は料理大会と変な事ばかりだった。

ちなみに料理大会では、刹那先輩が優勝した。1時間でフルコースを作り上げ、その料理を食べた審査員の有名な美食家や一流ホテルの料理人は、いきなり号泣するほど、美味しいと叫んでいた。

ため息を付いて、リストを置いたのと同時に会議は終わった。終わると同時に、咲華先輩とかなといっしょに自分の衣装を確かめる事になった。

魅華は「今日は少し用事があるんだ」と言っ、寮へ帰った。

他のメンバーは明日確認するらしく、それぞれのすべき事を優先させていた。

隣の部屋に入ると、ビジネススーツを着た男性が2人。メイド服を着た女性が3人ほど立っていた。

「咲華様と高宮様と師那樣ですね。どうぞ、こちらへ」

彼女達の後ろに付いて行き、それぞれの衣装の前で止まった。

「左から咲華様のドレス、高宮様のドレス、師那様のドレスとなっております」

「他の二着もすぐにご用意させていただきます」

「何かお申し付けがございましたら、すぐに私達をお呼び下さい」

そう言うと、彼女達は奥にある「準備室」と書かれた部屋の中に消えていった。

私は隣にいる二人のドレスと自分のドレスを見比べて、頭を抱えたくなった。

咲華先輩のドレスは、ワインレッドのシンプルなドレス。だけど、胸元と背中は大きく開いている。
彼女に似合いそうなドレスだ。

かなのドレスは、オレンジ色のフリルやリボンが沢山付いた可愛いドレスだ。

彼女に似合いそうな可愛いドレスだ。

自分のドレスは、というと。

黒で統一された綺麗なドレス。

胸元には控えめに白いユリの花が飾られている。
だが、横にはスリットが深めに施されている。

似合うわけが無い。

「先輩、この行事って辞退する事は出来るでしょうか」

「無理に決まってるじゃない。もし断ったら、学園長が何するか知らないわよ？」

そういう彼女は自分のドレスを掴んで、試着室のほうへ移動していた。

かなも同じようにして、隣の試着室へ移動していった。

私はじっと自分のドレスを見て、諦めて一度試着してみる事にした。
ドレスを掴み、別の試着室に入って制服を全て脱ぐ。そして、ドレスを着てみる。

「ピッタリ……」

改めて驚きながら、鏡で自分の姿をしてみる。が、似合っていない。やっぱり胸が無いと、体のラインが出るドレスは映えない。自分の数年前から成長していない小さな胸を見て、ため息を付く。すると、いきなり試着室のカーテンが開いた。

「!？」

「……すまない。着替え中だったか」

カーテンを開いたのは、彌悠先輩だった。

一瞬、突然現れた先輩に驚いたが、すぐに自分の制服を掴んで外に出た。

彌悠先輩はカーテンを掴んだまま、顔だけを私に向けて首を傾げた。

「もういいのか」

「はい。別の場所で着替えますので、先輩が使ってください」

「ああ、そうさせてもらう」

先輩はそのまま試着室に入り、カーテンで姿は見えなくなった。私は鼓動が早くなっていたのを抑えながら、携帯を開く。携帯を開くと同時に、メールの着信音が周りに広がる。メールの送り主の名前を見て、内容を見る。

『先輩、今、時間大丈夫ですか？時間があるなら、一緒にお昼食べませんか？』

「……………」

彼——望月翔太からのメールを見て、私はすぐに返事のメールを返す。

『いいよ。今日も天田と天巳も一緒だが、いいか？』

メールを送信すると、返事はすぐに返って来た。

『いいですよ。むしろ大歓迎です！それじゃあ、お昼の時間になったら要達を連れて先輩達の教室に行きますね』

私はそのメールを見て、初めて会った時の彼の緊張した姿を思い出しながら、魅華と涼にメールを送る。

彼と初めて会ったのは、最初のメールを送った次の日だった。
久しぶりに自分で弁当を作るのを忘れ、食堂でパンを買いおうとしていた時だ。

食堂に行く途中、彼に後ろから名前を呼ばれた。まだ新品に近い制服を着て、彼は緊張した顔で私に声を掛けて来た。

「高宮先輩、少し待ってください！」

私は振り返りながら、こっちに突進してきそうな彼を見て、驚いて棒立ちになっていた。

そこに、彼が勢いを消せず突進してくる。

「と、止まらない！？うわっ！」

「っつ」

私は咄嗟に私にぶつかって来た彼を受け止めた。
少し後ろに倒れそうだったが、普段から妖獣を狩る事で鍛えている

ため、倒れる事はなかった。

自分より頭一つ分くらい小さい彼を抱きとめ、動かない彼の肩を掴んで自分の体から離れた。

「大丈夫？怪我は無いか？」

「……だ、大丈夫です！」

「そう、なら良かった。で、私に何か用？」

彼はしどろもどろしながら、自分の携帯を開いて私が送ったメールの画面を見せた。

「……君が、望月翔太君か。初めまして」

「初めまして。先輩、メールありがとうございました。嬉しくて、返信できなくてごめんなさい」

「全然いいよ。……もしかして、それを言う為だけで呼び止めたの？」

「違います！その、あの……」

彼は少し周りを気にしながらも決心したのか、私の手を握って下から見上げてきた。

「僕の友人の偏食を治すのを、手伝ってくれませんか!？」

真剣な表情で見つめてくる彼だったが、私は思わず

「……私に頼まなくてもいい事じゃない？」

と彼に言っていた。だが、彼は「先輩じゃないと無理なんです!」
と言って、瞳に涙を溜めて言ってくるものだから、頷くしかなかった。

周りから見ると「何、あの人達」という感じだが、実際彼の友人に
会ってみると、彼が私に助けを求めてくる理由がなんとなくわかつ
た気がした。

だって、彼の友人というのは私の従弟で、私の言うことは聞くがそ
れ以外の人間の言う事は聞かないという、親戚の中でも特に変わっ
ている奴だったんだから。

「……人様に迷惑はかけるな、と何度言ったら分かるんだ」

「あ、響姉さん。姉さんもいる？」

「……………」

そう言って、笑顔で板チョコを差し出してくる従弟の机の上には、
ダンボールから溢れるほど板チョコが置かれていた。

私は無言でダンボールを掴んで窓を開いて

「それ、俺のなんだけど、何する気!？」

「要、これから一ヶ月チョコレートは禁止」

私は従弟の折野 要（おりや かなめ）の大好物、チョコレートを下の芝生で昼ご飯を食べている同じクラスの女子生徒たちに渡すために、窓から飛び降りた。

ちなみに、一年生のクラスは全て3階にある。

いきなり上から飛び降りてきた私を見て、クラスの女子達は驚いて悲鳴を上げたが、私は気にせず彼女達に頼んで、チョコレートを処分してもらう。

快く引き受けてくれた彼女達に礼を言いながら、私は要の偏食もとい食生活を正す為、次の日から一週間に4回ほど、要の弁当を作る事になった。

要は、私の料理なら美味しそうに食べる。他の人が作って食べさせようとすると、一口食べてやめるか、最初から食べない。

お菓子になると別だが。

それだと体調を崩しやすいし、糖尿病になる恐れがある。それを翔太は心配して、私に相談してきたのだ。

要に弁当を届ける役目を、彼は自分から言っただ。先輩は毎日忙しそつだから、と。

迷惑を掛けているのはこちらなのに、そこまでしなくてもいいと言

ったのだが、彼は自分がやると何度も言った。

それじゃあ、何か欲しい物ややって欲しい事はあるか？と聞くと、彼は少し悩んでこう言った。

「お昼の時間……一緒にご飯を食べてもらえませんか？もちろん毎日とは言いません！時間に余裕がある時で良いんです！」

そんな事でいいのかと思いながら、私は快く承知した。それからだ。時間に余裕があると、彼と一緒に食事をするようになったのは。最近では、魅華や涼も混じって、楽しい食事になっている。

「着替えて教室に戻るか」

私は携帯を閉じ、ドレスから制服に着替えて、自分の教室に戻る。この2週間は文化祭の準備期間のため、授業は無い。その代わりに、クラス展示やステージ発表はある。私のクラスはステージ発表でダンスを踊る。その練習を今も教室で行っているため、私は制服のスカートを脱いでジャージのズボン履いて練習に入った。

50分間の練習に疲れ、休憩を取ろうとした時、丁度授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

クラスメート達がそろそろと食堂のほうへ行くのを横目で見ながら、魅華と一緒に人数分の椅子と机を4つほど並べ、彼らが来るのを待った。

5：文化祭準備期間その1（後書き）

従弟登場。

彼は基本、涼と同じ扱いで行こうと思ってます。

いわゆるギャグ要員。

翔太君の方は重要キャラの方にしていこうかなと思ってます。

6：文化祭準備期間その2（前書き）

予定より大幅に遅れての更新になってしまいました（・ω・；）
さらにシナリオの予定も変更しました。

いきなり急展開ですが、この後の話に繋げるためには内容を大幅に変えないといけなかったので、ご了承ください。

それでは、どぞ。

6：文化祭準備期間その2

翔太達はすぐに教室に来た。

後ろにいる要や彼と同じクラスの男子一人を連れて、教室の前で手を振っていた。

それに気付いて扉を開いて、彼らを招き入れる。

今、教室には私達以外誰もいない。当然とは思うが、少しだけ寂しい。

教室に入ってきた翔太達は、軽く頭を下げて魅華達から少し離れた席に座る。

私はその向かい側に座って、寮から持ってきた弁当を要の目の前へ差し出す。

「ありがとう、姉さん」

「今日は要の好きな甘い出汁巻き卵を入れてるから。ちゃんと全部食べなさい」

「うん。全部食べる」

そう言って黙々と食べ始めた要を見て、私達も食べ始める。

魅華と涼は、事前に食堂で買ってきたパン。私は要の弁当のおかずの余りを詰めた物。

翔太ともう一人は、自分の家の専属シェフに作らせた弁当。

中身を比べてみると自分の弁当が一番安上がりだな、と思う。

材料は要が買ってくるし、余り物を詰めただけだから要の物より手間は掛かっていない。

でも、見比べてみるとずいぶん質素だなと思う。

無駄に豪華な物よりは親しみがあって食べやすいから、良しとしておく。

今日の自信作のミートボールを食べながら、翔太達や魅華と他愛も無い話をする。

朝の練習は疲れた、とか今年の学園祭はどうなるんだろうと皆で意見を交わす。

普通の会話なのに、何故か違うものに感じてしまう。

「そつえば、今年もアレやるんですかね」

「ああ、やるぞ。今年は男達も似たような事するからな……めんどくせえ」

「涼は、いいじゃない。私、何も選ばれなかった……暇」

「魅華はそれでいいんだよ。他の男に狙われたら俺が困る」

そんな事を平気で言う涼に、場をわきまえろという意味で足を踏み

つける。

「いつ、てえっ！何するんだよ、響！」

「早く食べないと時間、間に合わないんじゃないっけ？」

「ぬぁあっ、忘れてたっ！課題昼までに出さないといけないんだっ
た。うわ、間に合うか」

「間に合っても間に合わなくても、私達には関係ない」

睨んでくる涼を無視して、黙々と自分の弁当を食べ終わるとズボン
からスカートに着替えて教室を出ようとする。
その前に魅華に呼び止められた。

「今日も早く、帰っちゃうの？まだ、午後練習、あるよ？」

「ごめん、今日も用事があるんだ。それじゃ、今晚また」

「あっ……」

本当はそんなに急ぐ用事ではないのだが、早く行きたいと気持ちが
急くのだ。

魅華達には悪いと思っているが、こちらを優先させて欲しい。

心の中でもう一度謝罪の言葉を思い浮かべながら、鞆を持って教室

を出す。

人の波を掻き分けながら進み、靴箱でローファーに履き替えて寮の方へと向かう。

そして裏道を通って、あの洞窟の入り口まで早歩き。

入り口まで来るといつもの出迎えが一匹いた。

体長15cmほどの黒い蛇なのだが、人の言葉がわかる様で私の挨拶に頭を下げた。

そして蛇の誘導で、あの子に会いに行く。

「今日も来たよ」

『ひびきっ』

舌足らずの言葉で、赤ん坊から少年に成長した子供が私の名前を呼ぶ。

この子に初めて会ってから3日後に、またこの場所に訪れたのだが、その時にはすでにこの姿までに成長していた。

蛇は彼の護衛兼、案内役みたいなものだと思っている。

実際は何なのか分からないが、私に来るたびに蛇は洞窟の入り口の前で寝ている事が多い。

そっと『卵』に触れて少年に「こんにちわ」と言えば、彼も同じように「こんにちわ」と笑顔で返してくれた。

最初は生まれたての姿だったのだが、今は白いマントの様な物を羽織っている。

金色の光を帯びた髪をなびかせながら、彼は私の手と重なるように自分の手を重ねた。

「お腹空いてない？ご飯は食べた？」

『ごはん、たべた。でも、おなかすいた』

「それならよかった。サンドイッチがあるんだけど…食べる？」

『たべるっ！！』

元気に返事をする少年に、鞆の中からサンドイッチを取り出して手渡す。

『卵』の中から白い手だけが出てきて、サンドイッチを受け取って、少年は満面の笑みを浮かべた。

毎回何か食べ物を持つてくるたびに、手だけが『卵』から出てきて少し気持ち悪いと思ってしまうのだが、この笑顔を見るとそんな気持ちなんて霧散する。

口いっぱいサンドイッチを頬張りながら『卵』の中で浮遊している少年を見ながら、『卵』に寄りかかるようにして座る。

最近、妖獣を討伐するたびに罪悪感が心の中を満たしている。

原因はこの少年だと自分でもわかる。日常と非日常は区別しないといけないとわかっている。

だけど、妖獣の姿を見るたびこの少年を思い出して、たびたびミスをしてしまう。

その所為で昨日は久しぶりに大怪我を負ってしまった。

他の生徒会メンバーには秘密にしているが、軽く肋骨が2本ほど折

れてしまっている。

病院には行っていない。行ったら病院から学園長に伝わり、会長達に伝わってしまうからだ。

「はあ……」

『どうしたの？ひびき、げんきない』

「そんなに元気に見えない？」

『うん。かお、とってもあおい』

「……ちょっと怪我しちゃってね。まだ痛いんだ」

『きのうの……もしかして、あれはひびきだったの？』

「へ？」

驚きながら少年の方へ顔を向けると、少年が潤んだ瞳で私を見ていた。

今にでも泣きそうなほど、口元が震えている。

「え、ど、どうして泣きそうになってるの？」

『だって……ひびきに、けが、させちゃった…ひう』

少年を慰めてあげたいが、撫でることが出来ない事にもどかしさを
感じながら、『卵』の表面を撫でる。

彼は体を縮ませたまま、『卵』の端で本格的に泣き始めた。

「ああ、泣かないでつ。君の所為じゃないんだから、ね？」

『ぼくのせいだよお…ぼくが、おねがいしてるからあ…』

「お願い？何のお願いをしてるの」

『おそとがみたいって…ひとめでいいから、おそとがみたいって…』

「……え」

妖獣はこの子に懐いていた。もし妖獣がこの子の願いを叶えるため
に外に出ようとしていたのなら……。

この子の願いを叶えれば、妖獣はもう現れなくなるかもしれない。

「それなら、一緒に外を見に行かない？」

『ぼく……ここからでられない…でたいけど、こわい』

「大丈夫、私が傍にいてあげる」

『でも……ぼく、まだちいさいからよるだけしかつごけないよ？』

そう言われるときついかもしれない。

寮は原則、夜9時以降は生徒は外出禁止。さらに深夜に妖獣討伐のため、睡眠時間確保と訓練に武器の整備に宿題。

さらに文化祭の練習もある。夜は本当に時間が無い。

頭を抱え込んで必死に時間計算を試みるが、会長たちと時間が被らないようにすると10分程度しかない。

「うーん……」

『あ、あのね、ひびき。ひとつだけほづづがあるよ……』

「その方法って？」

『ぼくがもつとおおきくなればいいの。たぶん、ひびきとおなじぐらいになれば、おひるもうごけるよ』

「どうすれば大きくなるの？」

私の質問には答えず、ただ少年は曖昧に微笑んで入り口を指差した。突然の事に驚きながら、もう一度問いかけるが、彼はまた微笑むだけで何も分からなかった。

私は、渋々寮へ帰ることにした。

ただ、帰る直前に彼が言った言葉が頭の中にいつまでも残っていた。

『ひびき、ごめんね。ぼく、はやくおおきくなるから、はやくひびきとおなじせかいでいきたいから。……ごめんね』

あの悲しそうな声が頭の中で流れ続けて、私はそれを消すように鍛錬をして、今日の夜に備えて眠ることにした。

次の日の夜から、私は一人で妖獣を狩る事にした。

他のメンバーと交流が少なくなつて、次第にあの空気になじめなくなつたのだ。

前までは普通のことだったのに、何故か今はそれを拒否してしまう。昼も、私は一人で食べるようになった。

私は、これ以上メンバーに迷惑を掛けないよう、単独行動を取ることにした。

携帯電話も電源を落とし、一切連絡がこない様にしていた。

魅華と一緒にいこうと何度も言ってきたが、それも断つた。

断つた瞬間の魅華の泣きそうな顔に、私は罪悪感に襲われ、そこから逃げるように街の中を走った。

後ろから涼や先輩達の止める声が聞こえてきたが、それも無視をし

て。

「……ははは…馬鹿みたいだ…」

一人なんて、平気だったはずなのに。

自分から離れる様な行動を取ったのに、今にでも私は泣きそうだった。

自分を罵りながら、私は寝静まった街の街灯に寄りかかって、泣いた。

誰にも聞こえないように声を押し殺しながら、私は長年付き合ってきた友人や親友、先輩達を想いながら、泣いた。

私が泣いている光景を、いつの間にか周りに集まっていた妖獣達が見ていた。

「…ごめん。今、情緒不安定なんだ。加減できないからな」

そう言ったが、妖獣達はその場から動かず、ただ私の姿を見ているだけだった。

私は、泣きながら妖獣達を狩っていった。薙刀をふるたびに、あの子の顔が浮かんでは消えていった。

その場にいる妖獣全てを倒し終え、私は薙刀を投げ捨てて地面に座

り込んだ。

「ははっ……もう、嫌だ。もう……」

ふらりと立ち上がりながら、捨てた薙刀を拾って、私は寮に帰った。寮の自分の部屋に戻り、生活に必要な程度の荷物をまとめて、私は静かに寮から出た。

翌朝、高宮 響の存在は、行方不明者として学園中へと広がっていた。

6：文化祭準備期間その2（後書き）

まさかの、行方不明。

どうなって響がこんな行動をとったのかは、後々分かってくると思います。

次の話は、生徒会メンバー視点になるかな？

7：響の搜索

——響ちゃんが突然居なくなった。

その噂はすぐ次の日に学園中に広がった。毎日、女子生徒も男子生徒も話題は響ちゃんの事ばかりだった。

学園祭で盛り上がっている場合ではないと、皆言っていた。

女子生徒にも男子生徒にも密かに人気な響ちゃん。学園中の生徒が毎日、生徒会室に押しかけてくる。

皆、言ってくる事は決まっていた。

「彼女を捜させて欲しい」「自分達で彼女を捜したい」「搜索の許可を下さい」

だけど、会長はそれを認めなかった。

「彼女が居なくなったのは、私達生徒会の責任です。彼女を捜すのは私達の役目だ」

そう言っただけで生徒達を追い払っては、苛立つ感情を抑さえ込めようと、爪を噛む。

会長も必死で響ちゃんを捜している。私達以上に、会長は力を入れて毎日明け方まで捜し続けている。

でも、響ちゃんは見つからない。

私達も必死に捜している。響ちゃんの実家の方へも連絡を取り、帰ってきたら連絡を下さいと伝えてある。

家の力を使って、学園中、国中、世界中を捜させた。でも、手がかりは全く無かった。

部屋は綺麗に整理され、響ちゃんの薙刀も無くなっていた。でも、響ちゃんの使った跡は全く無かった。

生徒会室や教室、学園中は次第に暗い雰囲気になってきた。

響ちゃんを知らない人でさえ、歩きたびため息を付いていた。

響ちゃんが居なくなるだけで、こんなになるとは思わなかった。誰も思っはすはないだろう。

今日も暗い雰囲気の中、学園祭の準備をし終え、また響ちゃんの居ない日が終わろうとしていた。

「……はあ……」

寮に行く道をゆっくり帰っていると、ふと広場に誰かが立っているのが見えた。

女子生徒じゃないとすぐに分かった。制服が男子生徒の物だったから。

彼は私が近づいているのに気付いたのか、こっちに走ってきた。

そして、肩を強く掴まれる。

「天田先輩！高宮先輩からメールが来たんです！」

「えっ！？」

驚いて、一瞬彼が何を言ったのか理解ができなかった。
でも響ちゃんの名前を聞いて、反対にこちらが彼——望月君の肩を掴んだ。

「なんてっなんてきたの！？響ちゃんは、なんて送ってきたの？！」

「先輩落ち着いてください。すみませんが、会長や他の生徒会メンバーを集めていただけませんか？僕はこの広場で待ってるんで」

「分かった！すぐ戻る、から待っててっ」

持っていた鞆を投げる様に彼に渡すと、私は学園へと走って戻った。土足だったがそんなのかまわず、校舎を駆け上がり、生徒会室の扉を開いた。

「どっ、どうしたの？天田さん。そんなに慌てて…」

「それもローファアを履いたままなのかよ。魅華」

呑気にお茶をしている咲華先輩と涼を見て、部屋の隅に座っている彌悠先輩や刹那先輩を見つける。

会長は奥の豪華な机でたそがれている。傍には心配そうにかなちゃんに寄り添っていた。

走って息苦しいが、それよりも早くこの事を伝えないと。

「響、ちゃんから、メール、あつたって！」

その言葉に全員が目を見開く。あまり感情を見せない刹那先輩でさえ、驚いて口が開いたままになっている。

「望月君が、メールを……響ちゃんからメールがあつたから、皆を、待ってる！私、先に行くからっ」

そう言つて、私は来た道を戻った。階段は手すりを滑り、ある程度大丈夫な高さの階になって、窓から飛び降りた。

普段からこんな高い所には慣れている。すぐに走り出して、目の前に人が飛んでくる。

会長だという事は、その後姿で分かった。

「待ち合わせ場所は」

「女子寮前の、広場」

そう言うと、彼は普段は出さないスピードで走っていった。珍しいな、と思いながら当然だ、とも思った。

後ろから涼や先輩達の声が聞こえ、私達はゆっくりと走る速度を落とした。広場に到着した。

すでに先に到着していた会長は、望月君の携帯らしき物を開いていた。

その目は何か異常なものを見たかのように、忙しく動き続けている。

「紗那、内容」

「皆と話がしたい。この場所まで呼んで、迎えが来るはずだから。下にその場所の写真があります」

会長は皆に見えるように携帯の画面を見せる。

その写真を見て、前一度だけ響ちゃんに教えてもらった、あの道に似ている事に気付く。

「この場所…わかる。こっち」

私が皆を先導して歩く。広場から少し外れた小道を歩いて、寮の方へと向かう。

辺りはすでに日が沈んで暗くなってきた。私はかすかに見える道を歩きながら、記憶を頼りに先に進む。

そして、写真と同じ場所へたどり着くと、小さなウサギが座っていた。
ウサギは私達を見ると耳をピクピクさせながら、私達に近寄ってきた。

「もしかして…このウサギが？」

「…まさか、そんなのありえねえだろ」

涼がそう言ったのが気に食わなかったのか、ウサギは勢いよく跳んで足で涼の顔を踏んだ。

突然の事で反応できなかった涼は、顔を押さえながら「絶対に食ってやる」とウサギを睨んだ。

そんな事は無視するかのように、ウサギは歩き始め、数m進んで止まって振り向いた。

その顔は、まるでついて来いと言っている様に見えた。

「どうやらそうらしいですね。僕は先に行きますよ」

「あつ貴方に先を越させるわけには行きません！私が行きます」

「それなら早く進んでください。遅いです」

「言われなくても、分かってますっ」

少し早歩きで歩き出すと、ウサギはそれを見てまた歩き始めた。草を掻き分けて進みながら、寮へ向かう道を外れ、見知らぬ森の中へと入っていく。

不安を押し殺しながらウサギの後を必死に追っていくと、洞窟の入り口のような物が見え始めた。

ウサギは当たり前のように、どんどん洞窟の奥へと入っていく。

私達は少し戸惑いながらも、自分達の携帯の光を明かり代わりにしてその後を追う。

「ふみゅう、いつまで歩けばいいんですかあ」

「疲れてきたの？それなら私がおぶってあげましょうか」

「お姉様は刹那先輩の方をお願いします」かな以上に疲れているみたいですから」

「あらあら、刹那様。お顔が青いですわよ？おぶって差し上げましょうか？」

「…いい。自分の彼女におぶってもらうなど、男として駄目だろうが」

「まあっ…私は別にかまいませんわよ？」

「俺が気にするんだよ」

「……後ろのイチヤイチャしてるカップル。帰れ、マジで帰れ。時と場所を考えろよ」

……涼がまともな事を言った。明日は雨が降るかな。

まあ、こっちとしてはその意見に賛成だから何も口出しはしない。
ちなみに刹那先輩と咲華先輩は、学園公認カップルである。

後ろの会話を無視しながらウサギの後を追っていくと、行き止まりにたどり着いた。

だがウサギはそのまま進み続け、突然壁に向かって突進した。

「あぶなっ」

そう言うのと同時に、ウサギの姿は壁の向こうへと消えた。
驚いてウサギの消えた壁に触れる。だが壁に触れずに腕は通り過ぎた。

そのままゆっくりと入って、私達はさらに驚いた。

「……卵？」

部屋の中心に巢のような台座があり、その中に巨大な卵に似た形の何かがあった。

そして、卵の中に何かいる。目を凝らしながら近づくと、すぐにその正体が分かった。

金色に輝く私達と同じぐらいの、髪の高い男性が浮かんでいた。その腕の中には、見覚えのある姿。

「響ちゃん!!」

私は叫びながら近寄ろうとするけど、その手前で何かに遮られた。透明な壁の様なものがあって、響ちゃんまで後3mぐらいの所で進めなくなった。

必死にその壁を叩いて響ちゃんの名前を叫ぶけど、全然気付いてくれない。

まるで眠っているかのように響ちゃんは男性の腕に抱かれている。

会長が刹那先輩の銃を借りて、卵を打ち抜こうとしたけど、弾が卵に届く前に別のものに当たって遮られた。

この場に出てくるとは思っても居なかった存在。——妖獣だった。

まるで卵を護るために現れた妖獣。さらに数を増して卵の周りを囲っていた。

「何…こいつら。何でこんな早い時間に出てくるんですか?!」

「知るかよっでも、これじゃあ響を助けられない」

『必要無い』

「っ!?!」

突然頭に響いて聞こえた声に、驚いて頭を抱える。

それは他の人も同じだったようで、信じられない顔で辺りを見回し

ていた。

『彼女はすぐに返す。だから武器を収めてくれ』

「くそっ何なんだよ、この声！頭に直接響いてくる…」

「どこにいるんだ！姿を見せろ」

『目の前に居るじゃないか』

その言葉に、全員は信じられない顔で目の前にある卵を見た。

卵の中で響を腕に抱いている男性が、その瞳を開いていた。

その瞳は翡翠の様な緑色なのに、どこか狂気じみて見える。

彼はまるで天使の様な笑みを浮かべると、卵からゆっくりと出てきた。

腕の中にいる響ちゃんは、全く動かず、なすがままの状態になっている。

「響ちゃん！響ちゃんっ！！」

「大丈夫、ちゃんと息はしている。ただ、今は眠っているだけだ」

男性とは思えないぐらい綺麗な声で、彼は響ちゃんを壊れ物のように優しく抱きなおした。

無事な事にホッとしながら、私は目の前の男を睨んだ。

「貴方は何者、ですか。響ちゃんに、何をしたん、ですか」

「……俺は、お前達が妖獣と呼ぶ者達の主。かぐやの息子」

「はあ？じゃあ、お前がこいつらを操ってたのか？」

「操ってはいない。彼らは自分達の意味で行動する。俺は、ただ願うだけ」

「かぐやの息子とは何だ」

「そのままの意味で考えてくれれば結構。それより……」

彼は足音を立てず、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

思わず武器を構えると、彼は苦笑しながら透明な壁に触れ

「すまないが、ここから出してくれ。彼女を渡そうにも、話をしようにも、この壁が邪魔で仕方ない」

そう言っ腕の中の響ちゃんの頭を撫でた。

響ちゃんは彼の腕の中で、すやすやと眠り続けている。その無垢な笑顔に戦おうという感情が、徐々に無くなっていく。

「彼女は本当に呑気ですね」

「だが、彼女の笑顔は久しぶりだろう？白夜紗那」

「……何故僕の名前を知っている」

「それは…今は秘密にしておこう。ここから場所を変えた後で、ゆっくり話そう」

輝く金髪の、妖獣の主と言った彼は、そう言いながら楽しそうに首を傾げた。

その顔が、まるで新しい友達と遊ぶ小さな子供のように見えたのは、私だけだろうか。

8：成長した赤ちゃんはイケメンだった（前書き）

今回短いです。

8：成長した赤ちゃんはイケメンだった

聞き覚えのある声が聞こえてきて、ゆっくりと暗闇だった意識が浮上してくる。

目をゆっくりと開けていくと、見覚えのある顔が目の前に居る。その目が不安げに揺れている。私は彼女の名前を呼んだ。

「……魅華……？」

「響ちゃんっ！」

魅華が涙目で勢いよく私の上に押し掛かってきた。ついでに、首を絞められる勢いで抱きしめられる。

その反応に驚きながら上半身を起こす。嗚咽を漏らしながら、ぎゅっと力強く抱きしめてくる魅華の頭を撫でる。

「どうしたの？魅華」

「どうしたの、じゃないよ！心配、したんだから、ね。本当に、心配したん、だからあ」

そつえば、私はあの時何も言わず姿をくらませてたんだっけ……

私は今更後悔しながら、魅華に「ごめん」とだけ呟いた。

でも、優しい魅華は首を横に振りながら「響ちゃんが無事だったから、いいよ」と涙を流しながら微笑んだ。

その優しさが嬉しくもあり、辛い時があるのを、彼女は知らないだろう。

私はもう一度「ごめん」と呟くと、自分が生徒会室に居る事に気が付いた。

寝かされていたソファから立ち上がると、魅華が何度も心配そうに私の顔を覗き込んできた。

その行動に苦笑しながら周りの様子を見ると、部屋の奥のほうで他のメンバーが椅子に座っているのに気が付く。

その中には見知らぬ男も居た。

金髪の長い髪に翡翠の目、その顔は今まで見た男性よりも整っている。

体も服の上からでも分かるほど綺麗なフォーム。男とは思えないほどスタイルが良い。もしかしたら咲華先輩よりも綺麗かもしれない。全身から溢れ出るその色気も、咲華先輩と比べると彼女の方が劣っている様に感じてしまう。

花で例えるなら、咲華先輩は真っ赤な薔薇。男性は大輪の金色の薔薇の様だ。

思わず男性の顔を凝視していたら、視線に気付いたのか、目が合った。

「響っ！」

「へ？」

いきなり私の名前を呼んだ男性は、嬉しそうに顔を綻ばせながら椅子から立ち上がり、一瞬で距離を詰めてきて

「よかったあ…無理をさせてたから、目を覚まさないかと心配してたんだ。本当に良かった……」

そう言って私の体を抱きしめた。

私は今の状況が全く分からず、何故抱きしめられているのかも分からないまま、ポカンと口を開けて男性の顔を見上げていた。

そんな私に抱きしめている彼は何故か微笑んで、さらにギュッと抱きしめてきた。

もちろんこんな状況を許さない人は確実にいる。

「いきなり何をしてるのよ、この変態イケメン！響ちゃんを放しなさい！」

（変態イケメンってどういう意味?!）

「早く彼女を放さないと、完膚なきまで叩き潰して犬の餌にするぞ、てめえ」

（会長が普段より怖いっ？！言葉遣いまで荒いよ）

「体は大丈夫？どこか変なところとか、違和感はない？気分は平気？」

（で、この人は完全無視！？ええええええ、何この状況）

状況についていけず内心慌てていると、助け舟のように他のメンバーが止めにかかる。

今だ男性に怒り続ける魅華と会長の声が聞こえてくるが、私はこちらをどうにかした方がいいだろうと、男性と目を合わせる。

「あの……私は貴方とどこかで会いましたか？」

私の言葉に頭を撫でる手がピタリと止まった。顔も笑みからどんな表情が無くなっていく。

その反応に首を傾げながら「あの……」と問いかけようとした時、目の前の男性の目から涙が零れ始めた。

「え、え！？私、失礼な事言いましたか？ご、ごめんなさいっ」

「いや、違うんだっ。そうだね、この姿だと全然分からないよね。」

俺の方こそごめんねっ」

彼はそう言って私を抱きしめていた腕を外し、さらに泣き始めた。さらに訳が分からず、私はおろおろしながら彼の顔を覗き込んだ。そして自然と彼の頭を撫でていた。

すると、彼が涙目のまま目を見開いて私を見て、もう一度強く抱きしめられた。

「響……僕だよ。思い出して」

「思い出せと言われても…難しいんですが」

「あの卵の中に居た子供、だと言えば分かる？」

「卵？……あっ」

そういえば、彼とあの卵の中に居た子供はよく顔が似ている。

髪や目の色も同じだし、目の前の彼を幼くすればあの子供と重なって見える。

驚いて何度も彼の顔を見ると、彼は涙を止めて頬を赤く染めながら首筋に頭を乗せてきた。

「大人に、なれたの？」

「そうだよ。響の傍にずっと居たいから、急いで大きくなったんだ

よ」

彼と目を合わせながらそつと腕を伸ばして背中を抱きしめる。少し甘い匂いと優しい肌のぬくもりがとても心地よかった。彼の大きくなつた背中を撫でながら

「…嬉しい。貴方にずっと触れたいと思っていたから、とても嬉しいよ」

と言うと、彼は顔を上げて私の頭を撫でた。その顔がとても可愛くて、思わず頬が緩む。

「響つ。俺も嬉しい。響を抱きしめられて、響に触れられてとても嬉しい」

「はいはい。その気持ちは十分わかったから、一旦放してくれる？」

「響、冷たいっ！もう少しこのままで居させてよ」

私だって、ずっと君の触り心地の良い髪を撫でていたいよ。抱きしめてたいよ。

だけどね……—

「……………」

後ろから来る冷たい視線が痛い。今さっきから痛い。誰からか分らないけど、視線が背中に突き刺さってる。

こんな状況、私には耐えられません。

仕方ないので目の前の彼の手を剥がしながら、有無を言わずソファに座らせる。

彼は不満そうだったが、大人しく座ってくれた。

ほっと息を付いて後ろを振り向くと、そこには無表情の彌悠先輩。

（あれ…？もしかして今さっきの視線は彌悠先輩…？）

そう思って首を傾げると、先輩も首を傾げた。意味が分からない。

「はいはい、話が進まないから席に戻って頂戴な。響ちゃんはソファの上で寝ておきなさい」

「もう大丈夫ですよ、咲華先輩」

「駄目です。肋骨が4本折れてるのに、今は安静にしてなさい」

……私は予想以上に重症だったらしい。

一応確認のためにボタンを何個か外して胸元を見てみる。確かに固定するための包帯が巻かれている。

元に戻しながらゆっくりとソファに寝ると、平常心を取り戻した會長がいつもとは違い、真剣な表情で私を見てため息をついた。

「はあ…話が逸れましたが、元に戻す事にしましょう」

原因は私では無いですよ、会長。

話を逸らしたほとんどの原因はあの、元赤ん坊の男性です。

……あれ、そういえば彼って名前は無いのだろうか…？

後で聞いてみよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2241u/>

かぐや姫の置き土産

2011年11月6日07時27分発行